

御殿場農民福音学校と食肉加工品製造の実践

Gotemba farmers gospel school
and Practice of meat products manufacturing

松野尾 裕
Hiroshi MATSUNOO

要 旨

本稿は、昭和戦前期に賀川豊彦が提唱した「立体農業」（多角的農業経営）の構想と、その普及のために展開した農民福音学校運動について、御殿場農民福音学校高根学園における食肉加工品製造の実践を事例として取り上げ、考察する。農民福音学校農業指導者の藤崎盛一、食肉加工専門家の大木市蔵、そして彼らに学んだ勝俣喜六の努力により、1934年に御殿場養豚加工組合によるハム製造が開始された。その事業は一旦挫折したものの、1938年に群馬畜肉加工組合に場所を替えて軌道に乗り、日本初の農民資本（協同組合）による食肉加工事業を成立させた。

目 次
はじめに
第1章 賀川豊彦の「立体農業」構想
第2章 御殿場農民福音学校高根学園
第3章 大木市蔵による食肉加工品製造の指導
第4章 勝俣喜六と群馬畜肉加工組合の創業
む す び

はじめに

賀川豊彦（1888－1960）は、牧師であるとともに、社会事業家として活躍した。大正から昭和戦前期に精力的に取り組まれた賀川の活動は、労働学校、農民教育、福祉・医療事業など多領域にわたったが、いずれにおいても賀川は一貫して相互扶助（＝協同組合）による社会改良を主張し、実践へ導いた¹⁾。農民教育においては、土を愛し・人を愛し・神を愛すという「三愛」を説いた²⁾。

さて、賀川豊彦は、雑誌『雲の柱』³⁾1934（昭和9）年10月号の「身辺雑記」欄に、「富士山麓にて」として、次のように記している。

「こんど癒々年来希望してゐた豚肉加工組合

の小さな工場が、高根学園のうちに出来ることになった。勝又喜六君が農業大学講師大木氏の処^{（ママ）}に行つて、約2年間実習してきたので、その技術を用ひて、みんながやることになった。出資金は1口10円で、一方に於ては養豚組合を作り、他方に於てはハム、ソーセージの製造に専念することになった。4年前に窮乏した農村

1) 松野尾（2008）を参照。賀川豊彦に関する先行研究は多くあるが、まずシルジェン/賀川豊彦記念松沢資料館監訳（2007）、賀川豊彦献身100年記念事業実行委員会編（2011）、賀川豊彦記念松沢資料館編（2011）を参照。前二者は賀川の協同組合思想を理解するうえで有益である。賀川豊彦記念松沢資料館編（2011）は賀川^{（ママ）}の思想と実践の根底にあるキリスト教理解の特徴を論じた諸論文の優れたアンソロジーである。

を救ふため祈つた私の祈がきかれたので、私は感謝しつゝ、この加工組合の成功を祈つてゐる」⁴⁾

上の引用文中にある高根学園とは御殿場農民福音学校高根学園、勝又喜六とは正しくは勝保喜六（生年不詳－1977）、農業大学講師大木氏とは、当時東京帝国大学農学部と東京農業大学で豚肉加工技術の指導をしていた大木市蔵（1895－1974）である。

賀川豊彦が静岡県駿東郡高根村（現・御殿場市）に農民福音学校をつくる構想を示したのは、1930（昭和5）年8月のことであつた。それは同地の青年有志たちの賀川への働きかけによるものであり、翌31年に彼らの熱意と賀川の資金援助と地域の協力により校舎が建設された。上記の賀川の文章は、1934年10月、ここに「豚肉加工組合」が出来ると報じている。

農民福音学校は、日本の農村の再生を願つた賀川豊彦が、「農村更生と精神更生」の理念のもとに構想した、私塾的な農民教育の事業であり、1927（昭和2）年2月に兵庫県武庫郡瓦木村（現・西宮市）の賀川の自宅において、杉山元治郎⁵⁾の協力を得て1ヶ月間開催したのが始まりである⁶⁾。そして1930年から始まった恐慌により⁷⁾、農村が窮乏の度を深める中で、農民

福音学校の運動は全国的な広がりを見せるようになった。30年8月に御殿場農民福音学校⁸⁾が、32年5月には東京府豊多摩郡千歳村（現・東京都世田谷区）に武蔵野農民福音学校⁹⁾が開設された。これらの農民福音学校には生徒用の宿泊施設が設けられ、地元の農業青年はもとより全国から有志が参加した。3つの常設の学校の他に、数週から1ヶ月程度の期間で全国各地の小学校などを会場にして、農民福音学校の名で農村の生活改善・農業改良のための講習会が数多く開催された。

農民福音学校では、賀川豊彦をはじめとして、杉山元治郎、河上丈太郎¹⁰⁾、升崎外彦¹¹⁾らが講師となり熱心に講義をしたが、彼らは青年たちに生活の改善を説いたものの、いずれも農業の実践家ではなかった。

5) 杉山元治郎（1885－1964）は牧師であるとともに農民運動家として活躍した。杉山は大阪府立農学校（現・大阪府立大学）と東北学院（現・東北学院大学）神学部別科を卒業した後、農村伝道を志して福島県の小高教会の牧師となった。1914（大正3）年に農業青年の夜学のために小高農民高等学校を設立した。その後、1922（大正11）年に賀川豊彦と協力して日本農民組合を結成し、組合長に就いた。1932年の衆議院議員選挙に全国労農大衆党から立候補して当選し、以後代議士として活躍した。

6) 瓦木村の日本農民福音学校は現在、日本キリスト教団西宮一麦教会と社会福祉法人イエス団一麦保育園となっている。賀川が構想・実践した農民福音学校運動の全体については、雨宮（2006）48～83頁、シルジェン（2007）154～156頁を参照。

7) 1929年秋にアメリカ合衆国で起きた恐慌は世界へ波及し、1930（昭和5）年から翌年には日本の経済を危機的な状況に陥れた。

8) 御殿場農民福音学校高根学園は現在、社会福祉法人雲柱社高根学園保育所となっている。

9) 武蔵野農民福音学校は現在、社会福祉法人雲柱社祖師谷保育園となっている。

10) 河上丈太郎（1889－1965）は1928年の衆議院議員選挙（第1回男子普通選挙）に日本労農党から立候補して当選し、以後代議士として活躍した。河上は、衆議院議員になる前に関西学院教授をしていた頃に賀川豊彦と知り合い、賀川と高野岩三郎（大原社会問題研究所長）が協力してつくった大阪労働学校の講師を務めるなど、賀川の社会事業に協力した。

11) 升崎外彦（1892－1975）は救世軍出身の牧師である。1927年に和歌山県日高郡南部町（現・みなべ町）に労働学園を設立し、伝道と教育に従事した。

2) 松野尾（2013）、松野尾（2014）を参照。これらの論文では、賀川豊彦と思想的な繋がりのある北海道製酪販売組合聯合会（1925年創立、酪聯）と酪農義塾の活動について論じている。酪聯は、大正から昭和戦前期の北海道において、政府が主導する米作農業推進を批判すると共に、煉乳会社の酪農家支配を排除して、協同組合主義に基づく自作小農による酪農業（主畜農業）を確立した。酪聯により酪農家と製酪に従事する職員とを養成する目的で酪農義塾が設立された。なお、第二次世界大戦後北海道内で始められた「三愛塾」は、酪農学園短期大学（1950年設立、前身は酪農義塾、現・酪農学園大学）の初代学長樋浦誠（1898－1991）の提唱により、大学に來られない農業青年のために道内各地で開講された農民教育の事業である。福島（1987）を参照。

3) 『雲の柱』は、賀川豊彦が主筆となって1922（大正11）年から1941（昭和16）年まで編集・発行された月刊雑誌である。

4) 賀川（1964）192頁。なお、引用文中の漢数字は原則としてアラビア数字に改めた。以下同じ。

そこで、農業指導の専門家として賀川がもっとも頼りにしたのは藤崎盛一（1903-1998）である。藤崎は東京農業大学を卒業した後、福島県河沼郡農会の農業技師を経て、東京農業大学の助手を務めていたところを、賀川豊彦の求めに応じ農民福音学校の指導者となった¹²⁾。藤崎は武蔵野農民福音学校に住み込んで青年の指導に当たるとともに、全国各地で開催された講習会の巡回教師を務めた。藤崎盛一は賀川豊彦が提唱した「立体農業」の伝道者であり実践者である。「立体農業」とは農業経営の多角化のことである。藤崎は、賀川の構想を日本各地の自然環境や社会条件に合わせて具体化し、農村青年たちに蔬菜栽培、栗・胡桃などの木の実栽培、椎茸栽培、養蜂、豚・山羊の飼育などを指導した¹³⁾。

以下、本稿では、賀川豊彦が説いた「立体農業」の構想を考察し、次いで、御殿場農民福音学校高根学園の設立と、そこで試みられた当時農村では最も困難とみられた食肉加工品（ハム・ベーコン・ソーセージ）の製造の実践について詳述することとする。

第1章 賀川豊彦の「立体農業」構想

賀川豊彦は、1924（大正13）年11月に全米大学連盟の招待を受けて渡米し、アメリカ合衆国各地で講演をした後、ヨーロッパへ渡った。イギリス、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、デンマーク、スイス、イタリア、ギリシ

アを経て、エルサレムを訪れ、25年7月に帰国するという約9ヶ月にわたる旅行をした。この間の欧米からの短信が『雲の柱』に寄せられている。

1925年5月付の短信にこう書かれている。

「^{デンマーク}丁抹の広い野原に、西洋で稀に見る精神が残つてゐます。マルチン・ルーテルの真面目が、その儘に残つてゐるのです。^{デンマーク}農村には藁小屋が八割以上を占めてゐます。然し内部は実に美しく飾られてゐます。私はその四つを今迄にみて、もう全く感謝してゐました。その人々が私に丁抹式農民学校を作れと約四百円の金をくれました。義理にでも作りませう。明後日スウイスのジュネーブに出ます」¹⁴⁾

この時のデンマークとスイスでの見聞を賀川は農民福音学校で語った。そのことが、農民福音学校の講義録『農村更生と精神更生』（1935年）のなかに次のように記されている。

「先年私はスウツルランドを訪れて新渡戸博士¹⁵⁾に招かれた時に、同博士は『どうか日本に帰る前に、この国の田舎に行つて、彼等が如何に土を愛し、少しの空き地をも大事にしてゐるかといふ状態を見て行つて下さい』と云はれたことがあつた。よく見ると、驚いたことに彼等山国に住む人達は、想像もつかない程に土地を大切に、決して遊ばしたりなどしてゐない。湖辺に残る一寸の土地にも土を盛り、葡萄等を植付けて利用してゐる。4,000尺¹⁶⁾の高地にあるスウツルランドは^か斯くして苦心に苦心を重ねて土地を大事にしてゐる。それに比較すると、日本は土地を大事にすると自称しながら、まだまだ無駄をしてゐると思はずには居れない。またデンマークを考へても、彼等が如何に土を愛してゐるかを思はされるのである。私はデンマークの国民高等学校¹⁷⁾の招待を受けて、

12) 賀川豊彦が湯浅二郎（1890-1981、京都帝国大学農学部教授、その後同志社総長、国際基督教大学長を歴任）に農民福音学校の農業指導者の人選を依頼したところ、東京農業大学でYMCA（キリスト教青年会）を指導していた藤崎盛一が推薦された。藤崎（1976）79-80頁を参照。

13) 武蔵野農民福音学校は、戦時中中断したが、1947年から再開し55年まで続いた。藤崎盛一は、香川県の豊島（瀬戸内海の小豆島の西に位置する）に自身が主催する豊島農民福音学校を建設し、晩年までそこで過ごした。藤崎（1976）を参照。賀川は戦時中豊島で自給生活をしたことがある。

14) 賀川（1964）43頁。

15) 新渡戸稲造（1862-1933）は、東京帝国大学教授の農政学・植民政策学者であったが、1920年から26年の間、スイスのジュネーブに本部があった国際連盟の事務次長を務めた。

16) 尺は尺貫法の長さの単位。1尺は0.33メートル。

数年前講演旅行をして来たので、^{つぶさ}具に見聞することが出来たが、とてもその努力は大したもののである」¹⁸⁾

賀川は、スイスで見た「土を愛し」「土地を大切に」する農法を日本で実現するべく、新しい農業のしくみを構想した。その農業のしくみが「立体農業」と名付けられることになった経緯について、藤崎盛一がこう証言している。「〔賀川〕先生にはこうした構想が先生自身の頭に画かれていたのですが、更に先生に大きな影響を与えたのは、米国の元コロンビア大学教授で有名な農業地理学者ラッセル・スミス氏であります。同先生の著書「世界食糧資源論」(賀川先生の訳)の姉妹篇である“Tree Crop”を先生が「立体農業の研究」として日本に紹介されたのが昭和8〔1933〕年で、立体農業ということばが初めて日本の活字として現れたのです」¹⁹⁾

Tree Crop を直訳すれば樹木作物となるが、賀川はここから発想を巡らして「立体農業」という言葉をつくった。ジョン・ラッセル・スミス/賀川豊彦・内山俊雄訳著『立体農業の研究』(1933年)の巻頭に、賀川の「序説 日本に於ける立体農業」と題する一文が付されており、その中で賀川はこう述べている。

「我々は、樹木作物の間に蜂を飼ひ、豚を飼ひ、山羊を飼ふことは容易であり、その傍を流れる小川に鯉を飼ふことはさう困難でないと思つてゐる。その他、土地を最も有効に、多角形的にまた立体的に組合せて日本の土地を利用すれば、今まで棄て、あつた日本の原野が充分生き返ると私は思つてゐる。……私は一箇の社会事業家であつて、農業の専門家でない。然し私は社会事業家であるが故に立体農業の必要を主

張し得るのだと思ふ」²⁰⁾

藤崎はいう。賀川は「立体農業」を説くことによって、「米作農業は長短があり、長所は更に倍強すると共に短所を補強して、農業の完成を目指し、その補強工作として樹木農業と草生農業により家畜導入を強化すると共に、農村の工業化をも含めて、土地の立体的利用と生活の立体化を計るような農業のしくみ(営農)を強調されたのであります」²¹⁾

賀川の「立体農業」の提唱は、しかしながら、当時の農政では注目されなかった。藤崎は上記の文章に続けてこう述べている。「畑違いの先生の造言であり主張でありますから、官学の学説、官制の技術万能に立った米作重点主義の農業政策で、米作と芋作の批判をすることさえ非国民扱いされた時代に、余り注目されなかったのは当然のことであり、かえって弾圧されるような状況でした」²²⁾

賀川が説いた「立体農業」は、農政の権威者からは無視されたのかもしれないが、しかし、全国各地で開催された農民福音学校に集った農業青年有志たちによって支持されたこともまた事実である。そうした農業青年のひとりに岡山県つよしの久宗 壮 (1907-1985) がいる。

久宗 壮は、岡山県久米郡久米町(現・津山市)に生まれ、地元の農学校を卒業後、大原奨農会農業研究所(1914年設立、現・岡山大学資源生物科学研究所)に5年間勤務した。1930年に賀川豊彦が津山で行った伝道説教を聞いた久宗は賀川に大いに励まされ、この時以来、故郷

20) スミス/賀川・内山訳著(1933) 27頁。

21) 藤崎(1963) 2頁。

22) 藤崎(1963) 2頁。引用文に「弾圧されるような状況」と書かれていることについて、農民福音学校の講習会が特高刑事臨席のもとに行われたという事実がある。藤崎の回想によれば、瓦木村の日本農民福音学校の第6回開校式(1932年2月11日)は次のようであった。「この第6回の開校式は、賀川の小説『一粒の麦』の印税で新築した一麦寮で行なわれ、賀川はその校主、校長は杉山元治郎、教務主任吉田源治郎、主事金田弘義、専任講師升崎外彦らが列席し、2名の特高刑事が臨席して行なわれた」。藤崎(1976) 98頁。

17) デンマークの民衆学校である「フォルケ・ホイ・スコーレ」のこと。松野尾(2014)を参照。

18) 賀川(1935) 140頁。

19) 藤崎(1963) 2頁。引用文中で紹介されているラッセル・スミスの Tree Crop とは、Smith, John Russell, *Tree Crops: A Permanent Agriculture*, 1929である。その翻訳がスミス/賀川・内山訳著(1933)である。

で農業に従事しながら、久宗立体農業研究所をつくり、家畜飼育、木の実栽培、椎茸栽培など晩年まで立体農業の研究と実践に没頭した²³⁾

第2章 御殿場農民福音学校高根学園

1930（昭和5）年、賀川豊彦は、8月5、6両日に箱根堂ヶ島で開催されたイエスの友会²⁴⁾第8回夏期修養会に出席した後、10日に御殿場へ向かった。それは、御殿場から修養会に参加した3人の青年勝俣敏孝、滝口良策、野木忠之が北駿地方（静岡県東部の富士山南麓地域）の農家の窮状を訴えたからである²⁵⁾

北駿地方は火山灰に覆われた標高約600メートルの高冷地であるから、元来米作農業には不向きなところで、農家の現金収入は主に養蚕によっていた。1929（昭和4）年にアメリカ合衆国で始まった恐慌は瞬く間に世界に広がり、日本の農村にも襲いかかった。生糸の輸出不振による繭価の急落は農家に深刻な困難をもたらした。『御殿場市史』には、1932（昭和7）年8月に実施された駿東郡富士岡村（現・御殿場市）の生活状況調査の結果を述べた文章が掲載されている。それによると、

「村民は1升²⁶⁾に麦5～6合²⁷⁾またはその程

度の蔬菜をまぜた御飯を食べ、蔬菜類・漬物などを副食としており、肉は食べず、魚も月に1～2回しか食べない。電灯料を滞納したため、廃灯となったものが10数戸ある。全国の1戸当たりの農家負債額の平均は800円、駿東郡は850円といわれているが、富士岡村では1戸平均1,400円の借金をかかえている。養蚕がさかんなときは村全体で年収20万円もあったのに、繭価が暴落したために4万円にしかならず、箱根竹の伐採による収入も年額4万円もあったのに、今は3,000円しかなく、この箱根竹も花が咲いて枯死しつつある。不況のため出稼ぎから帰ってきた者が25名あり、村で生活できないためどこかへ離村した者が15名いる。まさに農村地獄である」²⁸⁾

箱根から長尾峠を越えて御殿場に入った賀川豊彦は、足柄街道（旧国道246号、現・県道御殿場小山線）沿いにあった山元靴店の離れに宿をとった²⁹⁾。そして、東隣の服部茂三男宅（畳店）を会場にして、8月12日夜から農民福音学校を開講し、自説の農村社会事業や立体農業を講義し始めた。最初の受講生は6人であったが、その後20数人まで増えたため、御殿場小学校の教室を借りて講義を続けた³⁰⁾

そうした中で、賀川は託児所を兼ねた校舎を

23) 久宗（1979）を参照。

24) イエスの友会は1921（大正10）年に賀川豊彦の提唱により結成された。その綱領は「1 イエスにありて敬虔なること、2 貧しき者の友となり労働を愛すること、3 世界の平和のために努力すること、4 純潔なる生活を尊ぶこと、5 社会奉仕を旨とすること」である。当初は14人の牧師でもって結成されたが、その後賀川の社会事業に共鳴した学生、農民、労働者などもメンバーとなり、賀川の活動を支える組織となった。1925年7月に開催されたイエスの友会夏季修養会において賀川により「百万の霊を神に捧ぐ」救霊運動が提唱され、それに基づいてキリスト教界を挙げて開始された「神の国運動」は、その後数年間にわたり全国に展開した。これにより賀川の活動が広く知られることとなった。

25) 賀川豊彦記念松沢資料館編（2007）8、21～22頁。なお、仁藤（1979）31頁、御殿場市文化財審議会編（1996）67頁、勝間田（1997）124～125頁では「勝俣敏孝」ではなく「勝俣俊雄」となっている。

26) 升は尺貫法の容積の単位。1升は約1.8リットル。

27) 合は尺貫法の容積の単位。1合は1升の10分の1。

28) 御殿場市史編纂委員会編（1983）419頁。さらに、『御殿場市史』には、農家の子女の生活困窮の様子が次のように記されている。「昭和5〔1930〕年4月に清水市内のある小学校で欠食児童が弁当を盗んだという事件がおり、6月に県労務部長が欠食児童の調査を行なったところ、沼津市第三小学校15名、駿東郡富士岡小学校9名、磐田郡袖浦小学校6名など、各小学校に欠食児童がいることがわかった。また、長欠児童が県に690名もあった。子守りのために学校を休んだり、農業の手伝いをするために学校を休んだりする生徒もあり、幼児を背負って登校する児童の姿もみられたのである。昭和8年7月1日の『北駿新聞』によると、御殿場小学校で農繁期中乳幼児を連れて通学した者は尋常科で29名、高等科で3名、子守りのために欠席した者は尋常科で59名、高等科で2名あった。1932～33年の静岡県内の欠食児童数は7,000人を超えたと記録されている。御殿場市史編纂委員会編（1983）417頁。

29) 御殿場市萩原地先。

建てることを青年たちに提案し、その土地の選定を勝俣敏孝に頼んだ。勝俣が西田中に見つけた土地（御殿場駅の北側、足柄街道沿いの杉原から清後へ向かう途中）は地主の土屋そのが提供を申し出たもので、そこを賀川はすぐに借りることに決めた。借料は年坪³¹⁾7銭で、始め3反³²⁾であったが、後に9反の土地が確保された³³⁾。

翌1931（昭和6）年7月23日、御殿場農民福音学校高根学園の校舎が落成した。建設資金1,800円は賀川が提供し、資材は高根村（現・御殿場市）の村有林から伐採された。建物は2階建ての34坪、屋根は萱ぶき、内部は洋式であった³⁴⁾。1931年のイエスの友会夏季修養会はこの新築の高根学園校舎を会場にして7月24日から27日まで開催された。講師として新渡戸稲造をはじめ、杉山元治郎、吉田源治郎³⁵⁾、黒田四郎³⁶⁾、駒井卓³⁷⁾、石田友治³⁸⁾、升崎外彦、中山昌樹³⁹⁾、河上丈太郎、マヤス博士⁴⁰⁾、賀川春子⁴¹⁾、タッピング⁴²⁾らが参加した⁴³⁾。

1931年8月15日から農繁期の託児所が開設

され、34年には静岡県内初の常設託児所となった⁴⁴⁾。後年の勝俣俊孝らによる「座談会 高根に集まった人達」（『雲の柱』1986年秋号）には、当時のことが次のように語られている。

「賀川先生がここにいらした時は農村恐慌のまただ中で、今のような機械ではなくて、畦^{あぜ}の上に子供を置いて気にしながらみんな手で田植えする、そういう状態でしたよ。貧乏なお母さんを楽しめてあげる、それも農村復興の1つだと、昭和6年から終戦まで春と秋と2回ずつ季節託児所をやったわけです。季節保育所で米1升ももらったら、あれはヤソにするためやってるんだから、そんなとこに出せないなんて……

30) 集まったのは、勝俣敏孝、滝口良策、野木忠之の他に、高相恒夫、鈴木千秋、勝俣諱、勝俣昇納、滝口文雄、土屋時雄、土屋馨、滝口芳太郎、岩田偉雄、勝俣喜六、勝俣伝吾、込山一郎、勝俣秀雄、山口一雄、武藤忠雄、伊倉栄一、稲穂恭平、稲穂良平、服部茂三男らである。仁藤（1979）36頁、賀川豊彦記念松沢資料館編（2007）23、37頁。賀川は、講義の合間に、『一粒の麦』の執筆も進めていた。『一粒の麦』（1931年）は立体農業の構想を普及させる目的で書かれた小説である。本稿注22を参照。

31) 坪は土地・建物の面積の単位。1坪は約3.3㎡。

32) 反は田畑の面積の単位。1反は300坪。

33) 仁藤（1979）37～38頁。

34) 御殿場農民福音学校高根学園の建物は、1966（昭和41）年に御殿場市東運動場内に移築され、「賀川豊彦記念館」として現存している。

35) 吉田源治郎（1891～1984）は明治学院出身の牧師。賀川と行動を共にし、西宮瓦木村の農民福音学校や大阪の西貫島セツルメントなどで中心的に活動した。

36) 黒田四郎（1896～1989）は神戸神学校出身の牧師。神の国運動では賀川に付き従って全国を巡回伝道した。

37) 駒井卓（1886～1972）は京都帝国大学教授・東京帝国大学兼任教授、動物学者。遺伝学、系統学、進化論を研究した。

38) 石田友治（1881～1942）はキリスト者で、大正期を代表するジャーナリストのひとり。1913年に雑誌『第三帝国』を創刊、編集。同誌には堺利彦、大杉栄、平塚らいてう、伊藤野枝らが寄稿している。関東大震災の復興支援や医療組合設立運動で賀川豊彦と協働した。

39) 中山昌樹（1886～1944）は明治学院出身の牧師、神学者。ダンテ『神曲』『新生』、カルヴァン『キリスト教綱要』、アウグスティヌス『告白』、トマス・ア・ケンピス『キリストに倣いて』などを翻訳。讃美歌の訳詩も行った。賀川豊彦とは明治学院在学中以来の親友。

40) マヤス博士（Harry White Myers, 1874～1945）はアメリカ合衆国南長老派から日本に派遣された宣教師。賀川豊彦は徳島中学に在学していた時、徳島市通町の日本基督教会でマヤスに新約聖書を教えられた。賀川は1904（明治37）年2月21日にマヤスから洗礼を受け、マヤスの指導により明治学院へ進学した。マヤスは農民福音学校では天文（星の話）を講じた。

41) 賀川ハル（1888～1982）は賀川豊彦の妻。豊彦と共に社会事業に献身した。

42) タッピング（Helen Topping, 1862～1953）は賀川豊彦の神の国運動や農民福音学校運動に協力するため、万国キリスト教連盟によりアメリカから派遣された婦人宣教師。賀川豊彦の英語秘書を務めた。両親は岩手県で伝道活動をした宣教師で、ヘレンは幼少の頃、岩手県で過ごした。

43) 『北駿新聞』1931年6月2日掲載の開催案内の記事による。御殿場市史編纂委員会編（1980）240～241頁所収。この記事によれば、聴講費について、「1円」のところ「北駿地方の者に限り白米3升又は金50銭と云ふ特典」が設けられた。申し込みは「高根村清後勝俣敏孝方、御殿場町二枚橋稲穂良平方、同町湯沢野木忠之方」となっている。

44) この託児所としての機能は、現在まで、高根学園保育所として続いている。

今思うと今昔の感がありますよ」。

「最初の頃はね、賀川先生が講演してまわって、そのあとも時々やるもんで、あれはヤソの手下で共産党だっていうわけで、演説会には必ずおまわりがついていたもんです。それで「社会の……」という言葉が出ると、「中止」とこうくるわけです（笑）。中止をきかずにやっていると、「ちょっとこい」ということになるんですよ。若いからうんと反発して負けたくなかったからね（笑）。それで、賀川先生が講演会を開いたり、岩井文男⁴⁵⁾さんが来て椎茸の講習をやっていると、おまわりも、「これはいいことやってる、おれも」（笑）というわけで、あの講習はうんと役に立ったわけですね。椎茸のほだ木の穴もうんと大きくて、菌が早くまわっちゃうから、その年にもうできたね。その講習を聞いて商売やった人もいたですよ。うんともうけたですね。それからどこも山羊を飼ったりして、おまわりもこれはいいことやってると、危険思想と思わなくなったです。そのうちに季節保育所も役場の方で力を入れてくれたし。初めは何しろ、歩けば後からついてきて（笑）たいへんだった」⁴⁶⁾

賀川豊彦が高根学園に集まった青年たちに何を語ったかを知る直接的な資料は見つからないが、次のような内容であったであろう。『農村更生と精神更生』のなかにこう書かれている。

「アメリカの大統領フーバー氏を助けて、食糧問題に就て大なる働きをなしたジョン・ラッセル・スミス氏は、樹木収穫といふことを唱導してゐる。しかもそれは梨や林檎や葡萄等の種類ではなく、団栗、栗、胡桃等の如く澱粉、蛋白質、脂肪、ヴキタミンを多量に含有する物を作らなければならぬといつてゐる。これからの農業は今迄の様に平面的でなく立体的にしなけ

ればならない。伊太利^{イタリア}のコルシカ島は、世界に於て最も人口の稠密な処であるが、胡桃や栗をつくり、それを豚に食はせてゐる。豚の鼻の突出してゐるのは、鼻で物をかき分けて食べるためであるから、放つてをいて落ちた実を食べるのが最も自然である。そして樹の実で育つた豚はハムやベーコンに加工しても最上等のものとして値がいゝ。布哇島のコナ村に後藤と云ふ人が荳科食物の花からは蜂蜜を取り実からは豚の飼料をとり1年間に3万円を下らない収入を得てゐる。而もそこは火山岩の瘦土であることを思ふと土を立体的に利用すれば、困ることがない。日本に於ても一毛作二毛作を工夫するのみならず、山からも盛んに澱粉、蛋白質、脂肪、ヴキタミンを生産するやうに心がけたいと思ふ」⁴⁷⁾

御殿場農民福音学校高根学園の事業としても注目されるのがハム・ソーセージ等の食肉加工品の製造である。

農民福音学校での農業技術指導に当たった藤崎盛一は食肉加工の専門家ではなかったから、その指導者として、当時横浜で食肉加工を営み、東京帝国大学農学部や東京農業大学で畜産実習の講師もつとめていた大木市蔵を武蔵野農民福音学校の講師として招いた。武蔵野農民福音学校には、農業技術指導施設として、500羽の鶏舎、15頭の山羊小屋、5頭の綿羊舎、蜜蜂5群があり、それらに加えて「豚舎も素人細工ながら1棟完成」させた⁴⁸⁾。藤崎盛一はこう述べている。「豚肉の加工は、一般に考へられてゐるのとは違つて、左程困難なものではなく、設備も極く簡単で済む。私はいま実際家大木市造氏の指導を受けてやつてゐるが、方法もまことに簡単であり、相当に商品的価値のあるものが容易に出来る」⁴⁹⁾

1932年秋、御殿場農民福音学校高根学園で学んでいた勝俣喜六が武蔵野農民福音学校へ派

45) 岩井文男（1902-1983）は同志社大学法学部出身。牧師となり、杉山元治郎の紹介で農村伝道を志した。勝俣の回想によれば、岩井は高根学園では「椎茸の講習」をした。後年同志社大学神学部教授、新島学園中・高等学校長、同女子短期大学長を歴任した。

46) 勝俣・他（1986）36、41～42頁。

47) 賀川（1935）140頁。

48) 藤崎（1976）108頁。

49) 賀川・藤崎（1935）147頁。

遣され、大木市蔵から食肉加工の技術を学ぶこととなった⁵⁰⁾

第3章 大木市蔵による食肉加工品製造の指導

大木市蔵は1895(明治28)年に千葉県そうき匝瑳郡東陽村(現・横芝光町)に農家の長男として生れた。1910(明治43)年、東陽高等小学校を卒業した後、横浜山下町で精肉店を営む叔父の高橋清七のところへ住み込みで働きに出た⁵¹⁾。この店は、郷里の千葉から生豚を仕入れ、豚肉卸しの専門店として営業し、また「千葉ハム」の名で骨付きハムの製造・販売も行っていた。大木市蔵はここで豚の屠殺・解体・加工の見習いとなった。店に豚肉を買いに来る客の中にマーテン・ヘルツというドイツ人がいた。彼はドイツ船のコック長を務めていたが、船から降り、当時横浜でハムやソーセージをつくり売って、生活していた。その原料を仕入れに高橋清七の店へ来ていた。大木市蔵は、ヘルツの工房を訪ね、店で作っていたハム以外にも多くの種類のハムやソーセージがあることを知り、それらの製法をヘルツに学ぶことになった。日本で造られていたハムの品質は良くなく、特にソーセージについては、日本では正しい製法がほとんど知られていなかった。大木の回想によれば、「当時、日本のハムは需要先から不評判で

あった。異臭のあるものは珍しくなく、ときには外国船、ホテル等の調理台に出しておく多くのウジが動き出した」。「明治末から昭和の初めごろまでは残肉利用という言葉があったため、ソーセージ等の残肉利用製品はまったく肉としての価値を失った。余り肉、売れ残りの古い肉というように考えられ、悪い肉でつくるように思われたのである。のち素人たちは実際にそのようなことで結着させたり着色させたりして粗悪品を製造して声価を落とした傾向があった」⁵²⁾

1914(大正3)年に第一次世界大戦が始まると、敵国人であるヘルツに対し行動規制が加えられ、ハム・ソーセージの製造は「研究目的」として認められたものの、販売は許可されなかったため、大木市蔵はヘルツと共同で「合資会社サシズ屋商会」を設立し、製品を販売することとなった⁵³⁾。サシズとはソーセージのことである。当時ソーセージという言葉はまだなかった⁵⁴⁾。こうして大木市蔵は叔父の店を離れ、独立して仕事を始めることとなった。1923(大正12)年9月、横浜を大地震が襲い、市街地は壊滅した。失意のマーテン・ヘルツはドイツへ帰った。サシズ屋商会の工房兼店舗は山下町から元町へ移転し、大木商会「大木ハム」の名で営業を再開した⁵⁵⁾

1924(大正13)年、東京帝国大学農学部教授の田中宏から大木市蔵へ同大学での授業の依頼があった。田中宏は畜産学の専門家であり、食肉加工の実習の担当者として大木を選んだの

50) この派遣のために賀川豊彦が15円を、高根学園の仲間が10円を拠出した。勝俣・他(1986)39頁。なお、勝俣喜六が大木市蔵のもとで学んだ期間については、本稿冒頭で引用した『雲の柱』所収の賀川文章によれば「約2年間実習してきた」とされており、大木市蔵の回想によれば「4ヶ年程の修業をせられ」となっている。大木(1958)20頁。この違いは、勝俣が2年間武蔵野農民福音学校で実習して御殿場へ帰り、高根学園でハム製造を始めた後にも、たびたび大木のところへ行って、指導を受けていたことによるものである。

51) 高橋清七の精肉店「江戸清」は1894(明治27)年に創業し、横浜市中区山下町(中華街)に現在もある。増田(2002)16頁。本稿における大木市蔵の伝記的記述は主に増田(2002)による。

52) 増田(2002)44, 48頁。

53) 1914(大正3)年に開催された第1回神奈川県畜産共進会に大木市蔵はハム・ソーセージを出品し、19年の中央畜産会主催第1回畜産工芸博覧会、24年の同第2回博覧会にも出品した。

54) なお、第一次世界大戦により捕虜となったドイツ人が収容された千葉県習志野原俘虜収容所では、当時農商務省の畜産試験場で食肉加工技術の開発に当たっていた技師の飯田吉英が、食肉加工の熟練工であった捕虜カール・ヤーン(Karl Yahn)の協力を得てソーセージの製造試験を実施した。飯田(1964)271～273頁。

55) 大木ハムは横浜元町で現在も営業している。

である。大木はこの依頼を受け、正課外の授業ではあったが、「駒場畜産研究会」の名で1937（昭和12）年まで授業を続けた。大木は横浜の工房から教材となる豚を選び、解体から種々のハム・ソーセージの製造までの一貫した工程を実習させた⁵⁶⁾ 1932（昭和7）年からは東京農業大学でも講師を務めることになった。

恐慌下の1932年8月に招集された第63臨時国会において「時局 匡 救 予算」が可決された。それに基づいて、農林省（当時）から訓令「農山漁村経済更生計画ニ関スル件」が発令され、農林省・県・市町村は経済更生計画・事業に着手した⁵⁷⁾ この経済更生計画には「副業」としての「農村工業」奨励策が盛り込まれており、そのなかに食肉加工も含まれていた。県主催・農林省後援の「食肉加工講習会」が全国各地で開催され、農学校でも畜産奨励の一環として食肉加工の指導が始まった。大木市蔵はそれらの講師として赴くこととなった。

大木による食肉加工指導の内容を伝える貴重な記録として、愛知県猿投農学校での実習記録である大木市蔵・鈴木洋一共著『実験 豚の屠殺解体加工法』（1939年）がある⁵⁸⁾ その冒頭の「第一章 豚肉加工の必要」を読んでみよう。やや長い引用となるが、次のように述べられている。

「近年農業経営の複雑化が提唱せられ有畜農業の必要を叫ばれるようになってから農村に於ける養豚は年を追ふて盛になつて来たことは慶賀すべきことであるが仔細に其内容を検討すると飼育管理に於て或は販売の方法に於て尚改善を要すべき点が多々ある。^{〔ママ〕} 豈んや豚肉加工の

如きは都会の一部の専業であつて農村人の手を染むべきことでないやうに大多数の農家は思つてゐるやうである。今の農家は自分の養つた豚を安く売つて其肉を高価に買ふことになつてゐるから豚肉も容易に口に入らぬ状態である。又加工を行はぬ故成豚は一時に市場へ殺到し市価が崩落して意外の損失を蒙ることがある。

翻つて国民保健の状態を見ると実に寒心に耐へぬものがある。このことは都会よりも時に農村に於て甚しい。何等栄養に理解無き極端なる粗食と過激なる労働とは農村民の体位を低下せしめ其活力を消耗せしむることが大である。これは国家の基礎たる農村の前途を暗くするものである。

農村に於ける養豚業に対しては従来の如く単に廃棄農産物の飼料化糞尿の肥料化のみを目標とせず之が加工又は半加工によりて経済上の利益を一層高むると共に其内臓及び脂肪等の利用によりて農村民の栄養を改善し活動の源泉を養ふことが出来る」⁵⁹⁾

このように、大木は、農業経営の多角化が奨励されるなかで養豚を盛んにすることの利点を説き、さらに生豚のまま出荷する現状を改めて、農村に於いて加工して出荷することを推奨した⁶⁰⁾ そのためには、農民自身が豚肉加工の技術を身につけなければならない。そのために

56) この時の授業の筆記録が、田中・大木（1933）である。

57) 臨時議会で可決された「時局匡救予算」は1億7,000万円。9月に農林省（当時）に経済更生部が設置され、10月に上記の農林省訓令が発表された。同訓令には「農村部落ニ於ケル固有ノ美風タル隣保共助ノ精神ヲ活用シ其ノ経済生活ノ上ニ之ヲ徹底セシメ以テ農山漁村ニ於ケル産業及経済ノ計画的組織の刷新ヲ企図セザルベカラズ」という記述がある。経済更生計画・事業の全般については本稿では論じない。

58) 共著者の鈴木洋一は愛知県猿投農学校長。この本は、同校で大木市蔵が数年にわたって講師を務めた「豚肉加工」の実習の一切を、謄写版印刷で268頁にわたり図を多用して詳細に記述したものである。凡例に、それらの図は「猿投農学校の設備並に加工の実演を写生したものであつて他の書籍より転載したものは1つも無い」とことわっている。そして、「本書は実用を旨とし加工理論の如きは他書に譲り加工豚の選定・絶食より説き起し屠殺解体の順序を述べ各種の加工法を詳説し更に内臓其他の料理・利用の方法をも説明し1頭の豚につき少しの廃棄物を出さず完全に利用する方法を仕事の順序を追ふて説明した。尚加工と経済との関係を示さんが為め加工品の相場をも処々に摘録した」。「本書は簡単な設備により各種の豚肉加工を実施せんとするもの、為に著したものである」と記されている。大木・鈴木（1939）凡例、1頁。

59) 大木・鈴木（1939）1～2頁。

大木は農学校に技術指導に出向いていたのである。

農民にとって最も関心があるのは、豚肉加工品を実際にどうやって造るのかということと共に、その製品をいくら位で販売できるのかということである。県や農会の政策担当者は、農家副業あるいは農村工業としての豚肉加工を唱えてはいたものの、加工品の生産・販売の仔細について、農民が納得のいく説明ができるわけではなかった。大木は生豚の仕入れから、屠殺、解体、ハム・ソーセージの加工まで1人ないし数人で行う技術を持っていた。加えて自身の店舗で加工品の小売りも行っていた。大木は加工技術者であるとともに、加工品の販売者として経験を積んでいたから、大木の説くことには説得力があった。

大木は、豚肉加工品の価格について具体的に説明している。「今(昭和14年)は日支事変〔日中戦争〕中で経済事情が普通でないから事変2、3年前に遡り其当時の相場に基づきて述べる」とことわったうえで、次のように説明している。

豚1頭(生体量25貫匁⁶¹⁾とする)の時価が25円。

普通に肥満していれば、1頭から7割(17貫500匁)の枝肉を取ることが出来る。その他に頭と内臓(1貫250~300匁)および血液(1升)を取ることが出来る。枝肉のうち2.5割が後肢の部分(4貫400~500匁)で、これを骨付きハムに加工する。枝肉の残りの部分からベーコン、ラックスハム・ボイルドハム、ソーセージを造る。

1頭の豚から加工される骨付きハム、ベーコ

ン等の出来高、価格はおおよそ以下の通りである。

	出来高	100匁当りの市価	価格
骨付きハム			
	4貫400匁	0円60銭	26円40銭
ベーコン			
	2貫匁	0円60銭	12円00銭
ラックスハム・ボイルドハム			
	1貫500匁	1円00銭	15円00銭
ソーセージ			
	3貫匁	0円75銭	22円50銭
		合計	75円90銭

生豚代25円以外の経費として、加工消耗品代10円90銭(製品1貫匁当り1円として計算)、委託販売手数料15円18銭(売上高の2割として計算)、合計51円08銭がかかる。

上記の販売高合計75円90銭から経費51円08銭を差し引き、利益が24円82銭となる。

この他に頭・内臓等を利用してヘッドチーズ、肝臓ソーセージ、血液ソーセージを造る。これらの価格が約10円00銭である。なお骨・毛が残る⁶²⁾

大木市蔵による食肉加工品製造の指導は、「簡単なる設備により各種の豚肉加工を実施せんとするもの、為に」行われたものであり、その意味で、上に紹介した農学校での実習記録は、農家で可能な設備と人員による、なおかつ高い品質の製品を造る方法を説明したものであるといえる。

しかし、大木は、今ただちに農家にそうした製品づくりを求めることには無理があることも承知していた。大木はこう述べている。

「今日の農業者の各戸に対し豚肉加工の実行を望むことは無理であるが加工組合を組織して行へば決して不可能のことで無い。特に加工品の良否は其原料たる豚の肉質と密接なる関係を有し肉質の如何は飼料の種類によりて左右さ

60) 大木は、半丸にして出荷するだけでも、生豚で出荷するよりは輸送費が削減され有利であると説く。大木・鈴木(1939)3頁。半丸とは豚を屠殺し、皮・内臓・頭・尾・肢端を取り去った体を骨付きのまま縦に2等分したもの。枝肉。

61) 貫・匁は尺貫法による重量の単位。1貫は3.75キログラム。1匁は1貫の千分の1。

62) 大木・鈴木(1939)2~3頁。

る、ものであるから加工組合員たる各農家が此点を充分理解し統制ある飼養管理を行つたならば必ず優秀なる加工豚の産出を見従つてこれを原料とせる加工品の優良なることは火を見るよりも明である。

要するに豚は繁殖力強く飼育容易にして肥満し易い家畜であるから豚の飼育と豚肉加工とが平行して農村に普及発達し其隆昌を見るに至つたならば以上述べた如く農村に新しい1つの副業を与え農業経営を合理化し其利益を増進すると共に農村の栄養を改善し更に進んで日本を肉飢饉より救ひ国家の食糧政策の一半はこれによりて解決することが出来一朝有事の際に於ける其効果は偉大なものであることを確信するものである」⁶³⁾

大木市蔵が、賀川豊彦と藤崎盛一の依頼により武蔵野農民福音学校においてハム・ソーセージ造りの指導をしたのは1932年からであり、大木が猿投農学校で講習した時期とほぼ重なっている。勝俣喜六が武蔵野農民福音学校で学んだことの詳しい内容を直接に知る資料は見つからないが、おそらく、農学校の実習記録の内容と同様のものであったであろう⁶⁴⁾

第4章 勝俣喜六と群馬畜肉加工組合の創業

1934(昭和9)年秋に御殿場農民福音学校高根学園へ戻った勝俣喜六は、早速、事業に取りかかった。高根学園に「御殿場養豚加工組合」が設立された。勝俣がリーダーとなって、組合員によるハム・ベーコン・ソーセージの製造が開始された。組合員はまた、「福音村土地利用組合」をつくり、休耕地を共同経営することも試みた。この共作地の収益を高根学園の運営資金に充てることを考えたのである⁶⁵⁾

63) 大木・鈴木(1939) 3～4頁。

64) 武蔵野農民福音学校の記念写真にはハムやベーコン、ソーセージを持った生徒たちの姿が写っている。増田(2002) 101頁。

御殿場には明治末頃から宣教師その他の外国人の別荘地が開発され、またキリスト教関係の施設が立地した⁶⁶⁾から、その点では、地域住民の間に欧米的な生活様式や肉食の文化が理解されやすい風土があった⁶⁷⁾このことに関し少し説明を加えておく。

御殿場には、1889(明治22)年に御殿場駅が開業し、東海道本線が開通した⁶⁸⁾1899(明治32)年の条約改正で外国人の「内地雑居」(外国人が日本国内に自由に居住すること)が認められたことにより、御殿場には外国人が避暑を求めて出入りするようになった。そうした事情を背景に、東田中の二の岡地区(御殿場駅の南側、箱根裏街道沿い)に外国人向けの別荘地がつくられるようになった⁶⁹⁾アメリカ南部バプテスト派宣教師として日本に派遣されたG.W. ボールデン(George Washington Bouldin, 1881-1967)は、1907(明治40)年に二の岡神社境内に別荘を建て、1918(大正7)年には新しい別荘地「万国村」に建て直し、西南学院第3代院長(1930～32年在任)を退いた後はこの地に定住した。ボールデンは、戦時体制により

65) 勝俣・他(1986) 38～39頁。

66) 1915(大正4)年にYMCAの宿泊研修施設東山荘が開館した。1925(大正14)年にはYWCAの宿泊研修施設富士岡荘が開館した(43年に閉館、売却)。

67) 翻って、日本における食肉加工品製造の嚆矢は、1874(明治7)年に横浜海岸通りでホテル業を営んでいたイギリス人「ウィリアム・カーテス」が鎌倉郡川上村(現・横浜市)で牛豚を飼育し、搾乳とともにハム・ベーコンを製造して、横浜居留地の外国人に売り込んだのが初めてであるといわれている。1882(明治15)年にはカーテスから製法を習得した斎藤満平が地豚4頭を用いてハム・ベーコンを製造した。その後、斎藤は製造を増やし、その製品は鎌倉海浜院(1887年創業、1916年鎌倉海浜ホテルと改称、1945年廃業)や箱根富士屋ホテル(1878年創業)などに「鎌倉ハム」の呼称で販売されるようになった。明治40年頃には製造所は川上村に5ヶ所(斎藤満平、益田直蔵、斎藤角治、藤岡商店、小泉清四郎)、神奈川、屏風ヶ浦、蒔田に各1ヶ所と増加した。飯田(1964) 16～20頁を参照。

68) 1934(昭和9)年に丹那トンネルが開通し、東海道本線のルートが箱根の南側に変更されたため、箱根の北側を通る国府津と沼津間のルートは御殿場線となった。

1936年に万国村が閉鎖され、41年に最終的に帰国するまで、万国村の運営に中心的な役割を果たした。また、地域住民にはとうもろこしやトマトなどの栽培、七面鳥の飼育、家具の製造などを伝えた。

地域の農家により「二の岡養豚組合」が結成されると、ボールデンはハムの製造方法を指導した。指導を受けたのは勝亦孝平、鈴木定次、森島宇三郎、芹沢正策である。工場は万国村の入り口のところにあった鈴木の実家であった⁷⁰⁾

ボールデンは賀川豊彦と交流があり、高根学園を訪れ、高根学園でのハム造りにも関心を寄せていた。

1934年秋から始まった御殿場養豚加工組合によるハム・ベーコン・ソーセージ製造は一定の軌道に乗り、製品は「富士ハム」の名で出荷され、最盛期には月間で約100頭の豚肉が加工された。

しかしながら数年後には、戦時体制下の経済統制により家畜飼料規制が強化され、原料豚の飼育が難しくなった。原料豚は減産の一途をた

どったため、原料確保が困難となり、資金調達や人員確保も難しく、「富士ハム」の製造は事実上停止した。製造所は操業中止のやむなきに至った⁷¹⁾

勝俣喜六は、1937(昭和12)年に群馬県に設立された群馬畜肉加工組合⁷²⁾(現・JA高崎ハム株式会社)に製造技術指導者として招かれ、御殿場を去ることとなった。これは、同組合から製造技術者の紹介を求められた大木市蔵が勝俣喜六を推薦したことによるものであった。その経緯は次のようである。勝俣は御殿場養豚加工組合で食肉加工品の製造を開始した後も、大木市蔵の製造所へ出かけ、製造の研究を続けていた。大木の回想によれば、その時「賀川先生にお目に掛り、群馬県の熱意を伝え、此の仕事に勝俣君を割愛下さる様お願いし、承諾を得た」⁷³⁾のである。

群馬畜肉加工組合では、工場及び付帯施設の建設一切を大木市蔵の指導のもとに行い、勝俣喜六を「畜肉加工技術担当」とし、操業の準備を進めた。そして翌1938年10月15日に操業第1日を迎えた。専務理事の大山福次が調達した原料豚は、群馬郡中川村(現・高崎市)の農家から初出荷された1頭だけであった。『高崎ハム二十年史』に、この日のことがこう記されている。「原料豚が、旧高崎屠場で屠殺解体され、寝食を忘れて協力指導された大木市蔵先生を迎え、勝俣喜六氏と共に枝肉を「バラシ」、

69) 当初、二の岡神社境内に別荘が建てられた。1917(大正6)年7月29日付御殿場町役場文書には、アメリカ人の「レーマン」が「土地ヲ借入レ毎年家屋を建設シ亜米利加村設立セント自称セル〔云々〕」とある。しかし、二の岡神社境内に外国人別荘が増えることについて神社の理解が得にくくなったため、1918年に福岡孝梯(子爵)が宮内省に働きかけて二の岡御料地5町2反歩(約5万2,000平方メートル)の貸下げを受け、ここに外国人の別荘を建設することとした。ここは別荘住人により「万国村」と名付けられたが、地元住民の間では「亜米利加村」と呼ばれていた。

万国村内には水道、電気が引かれ、教会、クラブハウス、プールなどの施設がつくられた。別荘住人と地域の人々との交流もあり、教会の日曜学校には地元の子供たちが出席し、別荘の家事や管理には地域住民が協力した。地域の祭礼(二の岡地区の地藏尊、沼田地区の湯立神楽)には別荘住人が訪れた。御殿場市文化財審議会編(1996)11~16頁。なお、教会は戦後修復されて現存。クラブハウスは現在「恵泉山の家」となっている。

70) 御殿場市文化財審議会編(1996)16~18頁。

万国村が閉鎖されると、工場は芹沢正策の敷地に移転した。現在同地で、二の岡フーズがハムの製造・販売を継続している。

71) 御殿場養豚加工組合の解散に関する記録は見出せないが、戦後再建されることもなかったようである。その理由は定かでないが、すぐ後述する通り、指導的立場にあった勝俣喜六が御殿場を去ったことが大きいと思われる。

72) 群馬畜肉加工組合は、群馬県西部の19の産業組合及び16の農会、計35組合員により出資総額1万円で設立された。群馬畜肉加工組合の設立の基盤には、群馬県西部(西毛)に培われた明治期の製糸組合以来の生産協同化の経験があった。群馬県東部(東毛)の勢多郡は群馬郡よりも養豚がさかんであったが、豚肉加工の協同化の動きは見せなかった。群馬畜産加工販売農業協同組合連合会編(1969)10, 65, 72~74頁。

73) 大木(1958)20頁。勝俣喜六の後を齊藤由一が引き継いだ、続かなかった。

肉質的に分類、秤量、精密な記録をなし、ハム、ソーセージ、ベーコン等各種の加工行程に移つたのである。然し、あの広い工場内に、一頭の原料豚を中心に大木先生、勝俣喜六氏、専務理事大山福次氏、参与井草彦次郎氏（群馬郡農会技師）の四人が立会つただけの淋しい操業であり、記念すべき開工であつた」⁷⁴⁾

戦時経済統制が強化されるなかで原料豚の確保と販路の開拓は大山福次が一手に担っていた。大山は、群馬畜肉加工組合の専務理事に就く前は、群馬郡国府村（現・高崎市）の産業組合の発展に力を尽くし、蚕糸組合を成功させた、群馬県の産業組合運動に大きな貢献をした人である。群馬畜肉加工組合が操業を継続できたのは、大山が地元の高崎歩兵第15聯隊（東部第38部隊）、高崎陸軍病院、熊谷飛行学校、宇都宮歩兵第59聯隊、横須賀海軍軍需部、東京習志野陸軍学校の大口納入契約を取り付けたことが大きい⁷⁵⁾。これらの軍納は統制外におかれたので、原料豚の生産に必要な飼料の農家への優先的な割り当てがあり、農家からの原料豚の出荷と、製品の販路の確保が、経営の安定をもたらした。同時に、一般卸も進め、製品は「高崎ハム」の名で地元や東京方面に出荷された。

む す び

群馬畜肉加工組合は、この組合が農家の組合であるという根本原則の啓蒙に努めた。『高崎ハム三十年史』には、創業当時のことが次のように述べられている。「畜産加工組合はあくまで生産農家の協同組織であるという意識を理論上にまた運営上にはっきりとしない限り発展を期することができないという原則を機会あるごとに展開してきたのであるが、設立当初から強化された統制経済とのからみ合いが中央に於ても

末端に於ても問題を発生させた。ことに、生産者の加工協同事業というものについては全く訓練されていなかった生産農家を啓蒙することはまことにむずかしいことであつた。……ことに、原料の確保のない限り生産の確保はないのであるから原料豚の提供を1つの義務であるという観念を植え付ける必要があつた。その具体的な対策は、生豚の公正取引と価格の維持による安定性をはからなければならない。この点が最もむずかしい点であつた。……地道なこういう啓蒙活動が実はだんだんと効を奏していったが、この努力は並大抵ではなかつた」⁷⁶⁾

任意組合として創立した群馬畜肉加工組合は、1942（昭和17）年1月に保証責任群馬畜産加工販売利用組合連合会へ改組され（認可指令書は43年2月1日付）、日本における初の農民資本（協同組合）による食肉加工事業を成立させた。

大木市蔵のハム製造の考えが、『高崎ハム二十年史』に、明快に示されている。

「自分の生産物は自分で加工すべきである。資本主義的になりたつもの一切が、農民の手からどんどんきりはなされるが、農民は、自らの手でこれをまもりぬかなければいけない。豚は容易に農家が飼養出来るし、これを農民が加工し半分を輸出するほどに発達すべきである。そういう意味から豚肉加工は、あくまで農民自身の手で完成すべきだ」⁷⁷⁾

この大木市蔵の考えは、藤崎盛一を経由して勝俣喜六によって引き継がれ、御殿場養豚加工組合を経て、群馬畜肉加工組合の「高崎ハム」として実現された⁷⁸⁾。根っからの協同組合主義者で農民教育に力を尽くした賀川豊彦の考えと大木市蔵の考えとは相通じるものがある。大木

74) 群馬畜産加工販売農業協同組合連合会編（1958）51頁。

75) 群馬畜産加工販売農業協同組合連合会編（1958）63～64頁。

76) 群馬畜産加工販売農業協同組合連合会編（1969）82～83頁。

77) 群馬畜産加工販売農業協同組合連合会編（1958）24頁。

78) 勝俣喜六は、1944（昭和19）年8月に応召し、49年9月にソ連から帰国した後、定年で退職するまで高崎ハムに勤めた。

市蔵は戦後、大木商会の経営を退き、郷里の千葉県へ戻った。1946年に大木は山武郡横芝村(現・横芝光町)にハム・ソーセージを造る小さな工場を建てた。「この工場は、採算を度外視し、いわば食肉学校の感が強く、一人前に育てては、必要とする企業に送ることのみを目的としていた」⁷⁹⁾

御殿場農民福音学校で賀川豊彦がまいた、農民の協同による食肉加工品製造の実践のための種は、藤崎盛一と大木市蔵の指導に導かれた勝俣喜六により、群馬の農村によき地を得て育てられ、大きな実りを結んだのである。

参考文献

- 雨宮栄一(2006)『暗い谷間の賀川豊彦』新教出版社
- 飯田吉英(1964)『豚と食肉加工の回想』飯田吉英氏回想録記念出版委員会
- 岩田さやか(2006)「アメリカ村村長 二の岡ハムの恩人 G.W. ボールデン」(『新岳麓漫歩』29)『SURUGA』No. 225 所収
- 大木市蔵(1958)「創業二十周年を回顧して」群馬畜産加工販売農業協同組合連合会編(1958)所収
- 大木市蔵・鈴木洋一(1939)『実験 豚の屠殺解体加工法』愛知県猿投農学校同窓会
- 賀川豊彦(1935)『農村更生と精神更生』賀川豊彦(1963)所収
- 賀川豊彦(1963)『賀川豊彦全集』第12巻, キリスト新聞社
- 賀川豊彦(1964)『賀川豊彦全集』第24巻, キリスト新聞社
- 賀川豊彦記念松沢資料館編(2007)『みくりやと賀川豊彦』(賀川資料館ブックレット)賀川豊彦記念松沢資料館
- 賀川豊彦記念松沢資料館編(2011)『日本キリスト教史における賀川豊彦—その思想と実践』新教出版社
- 賀川豊彦献身100年記念事業実行委員会編(2011)『Think Kagawa ともに生きる—賀川豊彦献身100年記念事業の軌跡』賀川豊彦記念松沢資料館
- 賀川豊彦・藤崎盛一(1935)『立体農業の理論と実際』(農村更生叢書30)日本評論社
- 勝間田二郎(1997)『御殿場・裾野・小山郷土誌 下巻』エビス印刷
- 勝俣俊孝・他(1986)「座談会 高根に集まった人達」『雲の柱』1986年秋号所収
- 加山久夫(2009)「みくりやと賀川豊彦」(1)~(8) 加山久夫ブログ「Who is Kagawa 賀川豊彦って誰?」
http://blogs.yahoo.co.jp/t_kagawa100 掲載
- 近代日本社会運動史人物大事典編集委員会編(1997)『近代日本社会運動史人物大事典』日外アソシエーツ
- 群馬畜産加工販売農業協同組合連合会編(1958)『高崎ハム創業二十年史』群馬畜産加工販売農業協同組合連合会
- 群馬畜産加工販売農業協同組合連合会編(1969)『高崎ハム創業三十年史』群馬畜産加工販売農業協同組合連合会
- 御殿場市史編纂委員会編(1980)『御殿場市史7 近代史料編Ⅲ』御殿場市役所
- 御殿場市史編纂委員会編(1983)『御殿場市史9 通史編下』御殿場市役所
- 御殿場市二枚橋区区史「二枚橋」編集委員会編(2001)『区史二枚橋』区史「二枚橋」刊行委員会
- 御殿場市文化財審議会編(1996)『御殿場の別荘(文化財のしおり第28集)』御殿場市教育委員会
- シルジェン, ロバート/賀川豊彦記念松沢資料館監訳(2007)『賀川豊彦—愛と社会正義を追い求めた生涯』新教出版社
- スミス, ジョン・ラッセル/賀川豊彦・内山俊雄訳著(1933)『立体農業の研究』恒星社・厚生閣
- 田中宏・大木市蔵(1933)『実用豚肉加工法 附製革法』西ヶ原刊行会
- 仁藤祐治(1979)『岳麓漫歩』悦声社
- 日本キリスト教歴史大事典編集委員会編(1988)『日本キリスト教歴史大事典』教文館
- 久宗壮(1979)『生命の樹に賭ける—立体農業のすすめ』富民協会
- 福島恒雄(1987)『北海道三愛塾運動史—樋浦誠先生の歩んだ道』北海道三愛塾運動史刊行会
- 藤崎盛一(1963)「“立体農業”生みの親」『賀川豊彦全集 月報16』(第12巻添付)所収
- 藤崎盛一(1976)『農民教育五十年 乳と蜜の流るる郷を求めて』豊島農民福音学校出版部
- 増田和彦(2002)『ソーセージ物語—ハム・ソーセージをひろめた大木市蔵伝』ブレーン出版

79) 増田(2002)160~161頁。大木市蔵は、戦後、日本食肉加工業協同組合常務理事を務めると共に千葉県畜産農業協同組合連合会副会長をも務めた。

松野尾裕 (2008) 「賀川豊彦の経済観と協同組合構想」『地域創成研究年報』第3号, 愛媛大学地域創成研究センター, 所収

松野尾裕 (2013) 「二人の協同組合主義者 黒澤西蔵と賀川豊彦－『乳と蜜の流るゝ郷』によせて」『日本経済思想史研究』第13号所収

松野尾裕 (2014) 「グルントヴィと北海道酪聯の開拓者たち－宇都宮仙太郎と出納陽一を中心にして」矢嶋道文編『^{レシブロシティー}互恵と国際交流』クロスカルチャー出版, 所収

謝辞 本稿の作成に当たり, 勝俣喜六と黒田四郎の各生没年及び, 勝俣喜六が御殿場養豚加工組合を退いた後齊藤由一がその後を引き継いだことについて, 杉浦秀典氏(賀川豊彦記念松沢資料館)からご教示を賜りました。お礼を申し上げます。

付記 本研究は JSPS 科研費 23530240 の助成を受けた(研究課題名「近代日本における相互扶助の経済思想とその実践に関する研究」)。